

紹介

「世界の研究室から」

(臨床環境12:50~52, 2003)

第二の故郷フランス

ー ボワギヤードさんとの出会い ー

清水 みどり

日本体育大学

Midori Shimizu

1999年4月から2002年3月までの3年間、私はフランスにある日本人学校で養護教諭として働いていました。この日本人学校は、全寮制で、フランスの現地校の敷地内にありました。

場所は、パリからTGVで1時間ぐらいのところにあるアンドレ・エ・ロワール県のサンシール市という小さな街です。街の横には大きなロワール川が流れており、たくさんのお城がありました。夏休みには、サンドイッチを持って川沿いをドライブしたものでした。



学校の近くで選挙演説をしていたシラク大統領と記念撮影 (シラク大統領の右が筆者)

私はフランスで、ステュディオに住んでいました。いわゆる間借りです。1つの家を壁で区切って、15畳程のスペースにキッチンとバスルームがあり、ドアも別々で、私個人のスペースは守られていました。大家さんはフランス人のボワギヤ

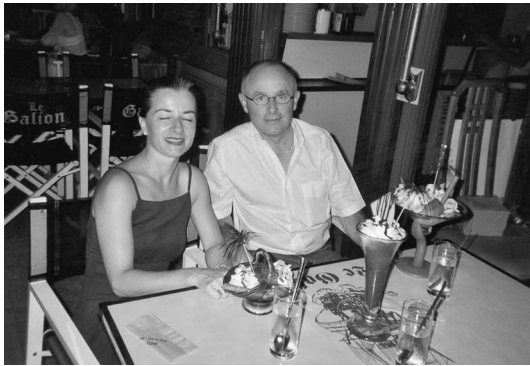
ードさんご夫妻でした。奥さんのキャサリンさんは看護婦、ご主人さんのファブリスさんは自動車工場勤務しながら、サンシール市議会で議員をしていました。フランスは議員の給料がとても安いので、他に仕事をしながら議会で働くというスタイルをとるのが普通です。

日本を出発する前、ビザがおりずにフランス大使館へ何度も脚を運んだり、到着してからは予定のTGVに乗れず、パリから夜行列車で4時間もかけてサンシール市へ到着するというトラブル続きで、くたくたでした。しかし、最初にフランスの家に到着した時、大変だったトラブルはもうどうでもよくなりました。真っ白な壁にセンス良く飾ってある美しい風景画、小さくて可愛いキッチン、そして完璧にメイクされたベットを見て、私が大家さんに歓迎されていることを感じ、とても安心しました。私は、まるで母が用意してくれたような温かいベットで12時間のフライトの疲れを癒しました。

キャサリンさんは1998年8月29日にファブリスさんと結婚し、私と同じぐらいの時期にサンシール市に引っ越してきました。そのため、友達がいなくて寂しかったようでした。私も日本から着たばかりで、友達がおりませんでしたから、フランス語のレッスンを通じて、友達を作りたいと思っていました。まもなく、私とキャサリンさんとのフランス語のレッスンが始まりました。キャサリンさんは、本格的な文法の本や子どもが勉強する

フランス語の絵本などたくさん本を買ってきてくれました。私は、キャサリンさんの気持ちに応えたいと思って懸命に勉強しました。フランス語の文法は本当に難しく、時には泣きながら勉強したこともあります。いま思うと、キャサリンさんがいなかったらあんなにフランス語を勉強しなかったでしょう。彼女がいつも優しく私を見守ってくれていたことが、フランス語を勉強するエネルギーになっていました。

初めてのフランスの夏休みには、南仏にあるボワギヤードさんの別荘へ2泊3日で遊びに行きました。別荘はニースとマルセイユの間にあるサナリーにありました。TGVも止まらない小さな街です。大都市と違ってごみごみしておらず、とても綺麗に整備された地中海の小さな海岸でゆったり泳いで、子ども達が青空の下で元気に遊んでいる風景見て、フランスならではのバカンスを堪能してきました。



ボワギヤード夫妻と南仏風パフェ

とにかく、フランスの子ども達は元気です。日本人学校の子どもと比べて、お喋りが大好きで、活発な子どもが多いような印象を受けました。フランスの学校の休み時間は、大勢の子どもが外に出ていつも大騒ぎでした。また日本人に興味があるようで「コンニチワ」と子ども達に日本語で声をかけられました。それに応えると、「フランス語は話せますか?」とコミュニケーションを取ろうとします。そうやって話しかけてくる子ども達が、きちんと自分の意見を主張できることに大変驚かされました。



卒業式に生徒達と(中央が筆者)

私の務めていた日本人学校には、寮があったので、夜中に病人が出ると寝ている所を起こされて、寝ぼけ眼で学校まで駆けつけたり、子どもが話を聞いて欲しいと訴えれば、夜中まで付き合ったりと24時間つきっきりで面倒を見ていました。私は、長い時間一緒にいたおかげで、子どもを自分の兄弟のように思えることができました。また、子どもが「先生、昨日は遅くまでありがとう。今日は元気になったよ」と楽しく学校生活を送ることは私の最大の喜びでした。私は、ボワギヤード夫妻に子ども達の様子をよく話していました。ですから、ボワギヤード夫妻は「みどり、昨日夜遅かったみたいだけど、病気の子どもが多いの?」と心配してくれることもありました。一方、私も看護婦をしているキャサリンさんが朝早く出かけると「昨日は随分早かったのね」と気にかけてたり、選挙の前にはファブリスさんを励ましたりしました。3年の間、日常の出来事を話し、お互いに理解することで私達は本当の家族のようになりました。

帰国の2日前には、お別れパーティを開いてくれました。とっておきのレストランでシャンパンを開け、楽しく食事をしました。しかし、ボワギヤード夫妻が「まるで娘を失うようで寂しいよ」とうつむく場面が幾度もありました。私も本当に辛かったです。その後、美しいシャンボール城まで出かけました。そして、「私の家は、あなたの家よ。私達はあなたのフランスの家族なんだから、辛いことがあったらいつでも帰っておいで」と温かく送りだしてくれました。

私は、ボウギャード夫妻に本当に感謝しています。ボウギャード夫妻がそばにいてくれなかったら、フランスの生活を楽しく過ごすことができなかったでしょう。いつも見守ってくれる人がいる

こと、そのことでどんなに勇気づけられるか肌で感じ取ることができました。私は、養護教諭として子どもと接する時、いつもボウギャード夫妻のような優しい気持ちになりたいです。